

永井隆『輝やく港』（未発表作）

－作品と原稿－（2）

An Introduction of Takashi Nagai's
Kagayaku Minato [A Bright Port] from the Original Manuscript (Part 2)

小西哲郎

Abstract

Following the previous paper, this article gives a partial introduction and a comment to Dr. Paul Takashi Nagai's unpublished work titled Kagayaku Minato. Though this work lacks its former part, it still has the original meanings and values, showing the living and social conditions of the people of the Urakami Catholic Church in those days. The author also points out some parallels in the contents to Nagai's other works.

序

前号¹に続き、ここでは永井隆（1908－1951）の未発表の作品『輝やく港』の原稿を紹介する。前号で述べたように、この作品の原稿は元来四分冊で、今回確認された二冊はその第3部と第4部であると考えられる。（今回確認された原稿全体の構成については、前号を参照されたい。）以下に紹介するのは、原稿第3部の「クリスマス」の「一九四五年」から、原稿第4部の「あとがき」までである。なお、難読箇所解説に濱里欣一郎氏（長崎如己の会会長）のご協力をいただいた点、および本文中のルビ・用字法が原作者のものである点は前号と同じである。

（永井隆『輝やく港』より）

一九四五年

クリスマスが近づいた。

小さなくりくり頭とおかっぱと並んで寝ているのは同じだが、いや、一年の間に少しは大きくなったかも知れない。布団はなくなって戦災者用の白い綿毛布を引っかけているのが、七輪に燃やすチャブ台の足の火に照らし出されていた。枕もとの救急袋の用はなくなって、その代わりに配給の粉の入ったドンゴロスの袋があり、口をくくった縄の端がおかっぱの上に垂れさがっていた。相談相手の妻がおらぬのに慣れたといっても、まだ絶えず目の前の荒むしろの空いているのが私を寂しがらせていた。……これから如何するか？——いつもこの問いが私をとらえて離さなかった。——この二人の子……

外はまだ暮れてはいなかったが、ろうそくは無し、トタンのすき間から切りこむ風は冷たいし、おもちゃは無い、手もとの明るいうちに、ぞうすいを腹に流しこむと、子供は綿毛布にもぐりこんで寝てしまった。眠るがいい、眠っている間は楽しみを夢にみることもあろう。

クリスマスが近づいている。あのベトレヘムの馬屋はこのトタン小屋よりもひどかった。馬や牛から息を吹きかけられて、ぬくまったというイエズス・キリスト。それを想えば文句はない。

「こんばんは……」

訪れたのは聖母の騎士のロマン修士であった。大きなカバンを抱いて来た。

「子供寝ましたか？——」

「はい、寒いから——」

「寒いね。先生。寒い薬あげます」

カバンから取出すココアと砂糖。

「あのね。わたし友達兵隊くれましたね。これね。元気つくよ。子供ね、少し薄くして。……ああ、子供これ好いね」

レモンジュースの粉を出してくれた。

「ありがとう」

「修院長さまね、浦上の人にクリスマスの贈物をしたいです。明日ね、馬車で持ってきます。先生くばって下さい。」

「え？——馬車で？——何を——」

「あのね、いろいろ。頼みます」

ロマン修士は今年のクリスマスの話をして「天主さまの思召しはわからないものですね。一年のうちにこんなに変わるか！……」と云って帰っていった。

子供が首をもたげた。目がさめて、みんな聞いていたのだ。私は七輪にやかんをかけた。

「起きなくていいよ。待ってな。御馳走するぞ」

やかんが暑くなってきた。小屋の中もあたたまってきた。湯気が立ち始めたからだけではあるまい、ロマン修士のあたたかい愛情のせいだろう。

ジュースもココアも出来た。毛布から首だけ出して、ふうふう湯気を吹いては、すする有様は、かぜひきが振出し薬を飲んでるみたいであった。

「うまいもんだねえ！……まるでうそのようだ」

「明日馬車に積んでくるの？みんなこんなうまい物？……」

「そうだよ、きっと御馳走だよ」

「うわあ！……この小屋には入らんねえ」

「なあに、村じゅうへ直^(ママ)げ分けるんだから」

「うれしうして、今夜は寝られんばい」

そんなことを云ったものの、腹いっぱい熱いレモンジュースを飲んで、体がぬくもったものだから、いつのまにか二人ともすやすや眠ってしまった。

私も同じ毛布にもぐりこんだ。何年ぶりに頂いたココアに気が立って眠れない。

……ロマン修士が云うように、天主の思召しは予め見当をつけることはできない。何ひとつとして私の思った筋の通りに動かなかった。

あれからポーランド人の修道院はいよいよ軍から押しつめられ、七月には阿蘇山の中へ移された。八月に入ると、後片附けに残っていたミロハナ神父とゼノ修士も仕事が終わって、いよいよ阿蘇へ引きこもり、あとは長崎防衛軍司令部に明渡すばかりだった。祭壇にとり続けてきた燈火もついに消え

る日が来ようとした。——そのとき、原子爆弾は浦上に裂けたのだった。山を隔てていたので修道院はガラスが爆風で壊れ、ロマン修士の作った石膏像がいくつか砕けただけだった。大工小屋にいたゼノ修士が下敷になって気絶した。修士に言わせると、原子爆弾が脳を壊したので物覚えが悪くなったのだそうである。修道院のわずかの道具や服は阿蘇へ送るために貨車に積んであったが、長崎駅と共に焼け果てた。——しかし戦争は終わった。軍はなくなった。特高もなくなった。ポーランド人は自由をとりもどした。修士たちは阿蘇から帰ってきた。日本人の神学生や修士も兵役や徴用から散かれて帰ってきた。祭壇の燈はついに消えずに、燃え続けた。

愛の聖人アシジのフランシスコの精神はこの修道院に生き生きとして動き出した。修士は大きなカバンを抱いて走りまわった。有った人から施しを受け、それを戦災者の小屋に配ってまわった。占領軍の兵士たちは祖国²から送ってきた慰問品を修道院へ持ちこんだ。修士たちはいよいよ清貧の徳をみがいた。たびたび断食して祈った。そうして浮かした食糧を私たち浦上の者に贈るのであった。

あくる日、修道院の馬車は来た。メリケン粉、砂糖、肉かんづめ、キャンデー、フルーツケーキ、チョコレート、干しアンズ、干しブドウ、クリスマスカード、御絵、ロザリオ……

原子野に残って生きている人は少かったから、この贈物は一人一人がクリスマスを祝うのに十分な分け前になった。思いがけない御馳走をもらって村人はどんなに驚き、どんなに喜んだであろう！——貧しい修道院の断食修士の贈物であった。

いよいよクリスマス。

二十四日の午後、私たちは天主堂の崩れたれんがの塊の間から鐘を一つ引上げることに成功した。もう一つ大きい方の鐘は割れ砕けていた。夕方やつのことで、れんがが山の上に丸太を渡し、それにチェンブロックをかけたまま鐘をぶらさげた。そうして、アンゼラスの祈りの時刻に初めてそれを鳴らした。

何年ぶりにきく鐘の音であつたらうか？

「……アレルヤ、アレルヤ。明日に至らば地の不義はかき消されん……」

私たちは焼跡にひざまずいて祈った。

「天は歎ばん、地は主の御顔の前にて、こおどりせん、そは主来りたまえばなり」

その夜、

浦上のミサは聖フランシスコ病院の地下の物干場でささげられた。

私の家族は聖母の騎士修道院へ招かれた。食堂は歓びでわきかえった。日本人の修士がたくさん帰っていた。そして修士たちは今日だけ沈黙を解かれたのである。長い月日沈黙の行を守っている人間が短い時間を限って、話をしているといふと許されたときの、その口の動かし方を想ってみるがいい、しゃべりたいのがのど元まで押し出してきても、舌が練習不足で思うように動かぬものらしい。互いに抱き合って肩に接吻し、それから手にもった大きな味なしウェファーを互いに差出す。相手のウェファーの端っこを、ぼきんと少し折りとって、互いに「おめでとう」と云って口に入れる。俗人なら乾杯するところであろう。片手に白いウェファーを持って食堂の中を回り、兄弟ひとりひとりと歓びの抱き合いをする修士の群は美しかった。男ばかりで酒もなく歌も出ないが、沈黙を解かれたので自分の声に酔っているのだった。

零時から始まった真夜中のミサの美しかったこと！……ロマン修士の設計で、修士や神学生が工夫の限りを盡して飾ったポーランド風の祭壇であった。スラブ民族はこういう宗教芸術は念入りだ。ス

イセン、カンギク、ナンテン、キンセンカ、カーネーション、ロウバイ……大祭壇から脇祭壇まで、花で埋まって、芳ばし^(ママ)香りがむんむんしていた。きらめく豆電球、ゆらめくろうそく、——聖歌隊席から雲わく如く「グローリア、グローリア……」の歌声が起った。それは全く天使の群が雲の中から歌っているようだった。「……いと高き処には天主に光栄、地には御好意の人々に平安——」

……祭壇の前に小さなランプがともっている。この修道院を建てたマキシミリアン・コルベ神父さまが火をつけてから二十年ばかり、この炎はいよいよ消えそうになったのに、思いがけない終戦、信仰の自由、いまこうして大勢の信者の前に燃えている。けれども別に大きく盛んに燃え上がっているのではない。初めと同じように、世の中のいろいろの勢力が栄えたり亡びたり衰えたりするのに関わりなく、小さな揺がない燈であった。

歓びの歌に我を忘れていたポーランド人修士たち——祖国³はいまはソヴィエトに占領され、本部は奪われ、本部の兄弟修士たちは殺され、たった十人ばかりで東洋に働いているというのに、あんなに落着いて、自分の席についている！

まさに大きな岩が坐っているような安らかさだ。

ピストルも小刀も持たず、財産も有たず、すぐれた才智もなく、地位もなく、権力もなく、——何のとりえもない平凡ないなか者に過ぎない。しかも祖国⁴は亡びて、領事もおらぬから、頼りになる力はない。

「マリア——」

この修士たちは口を開けばこう唱える。サンタ・マリアだけが頼みである。

一九四七年

木造の天主堂がもう建っていた。もとの司祭館の土台の上に建てられたので小さかったが、それでも村の生活の中心となり、村人の生きる力の源となる聖体がその祭壇につねにましますことは何にもましてうれしかった。ヨーロッパの村や町が天主堂を中心にして大きく栄えてゆくのはなぜだろうと、おかしく思う人も多いが、天主堂の祭壇の至聖所にまします活きたイエズス・キリストが村人や町民のその日その日の生活の原動力であることに気づけば、すぐ解るであろう。カトリックの生活は活きたキリストを中心とした生活であって、人間を主とし、神を加勢に頼む生活ではなかった。

天主堂ができ、毎日ミサがささげられるようになると、浦上の建て直しも目立って活気づいた。

もとの天主堂のくずれた赤れんがの山も信者が代る代る出かけて片附けた。そういう仕事を若い人は奉仕と云い、年をとった人は公役と呼んだ。公役はクヤクと発音するものだから、知らぬ人は苦役かと思いがいをした。浦上の生活は天主を中心に仰いで宗教共同体生活であるから、いわゆる公役は多かったが、信仰のあつい人は祈りと犠牲についてよく解っていたから、よく働いた。赤れんがの山も初めに一目みたときには、だれだって、これは手がつけられぬ、とため息をついて肩の力を抜かしたのだったが、いざ取りかかってみると、アリが食物をいつのまにか運び去るように、端からなし崩しに片附けて、月日は長くかかったけれども、とにかくあの山は消えてしまった。残っているのは、南西の角と、南の壁の一部分であるが、信者の方では、危くもあるし、目ざわりにもなるし、きれいさっぱり取片附けたいと云っているけれども、信仰を^(ママ)もたずに気分だけ有難がる文化人たちは、記念物としてそのまま残すように云いはって、話はことまらない。天主堂というものは名所旧跡ではなく

て、現に生き活きと生きて超自然の働きをしている仕事現場であり、見物して写真をとるために在るのではなくて、祈りをし、恵みを受けるために在るのである。

天主堂ができ、天主さまも辛抱して坐って下さった。実を云うと、王の王たるキリストの宮殿だから、どんなに美しく、どんなに大きく建てても、それで十分だということはない。けれどもまた、寒い馬屋に生まれ、ぜいたくもせぬ大工の家に育ち、キツネは穴に眠るが私は寝る家もないと云って、野を山を湖をゆきつつ福音を伝えなされたキリストであるから、どんな貧しい家にも喜んで入りこみなさるであろう。大事なのは天主堂の建物ではなく、仕える信徒の心である。目にみえる教会ではなく、信徒の心をあつめた霊的教会であった。

浦上の霊的教会の建て直しが出来るかどうか？――

さて天主堂もできたから、私たちはそれぞれ自分の家の本建築をした。今年のクリスマスは畳の上で祝う身分になったのである。とは云うものの、六畳ひと間の家に森山のおばあさんと同居していた。私はもう寝こんでしまって、人々の手をわずらわすだけの生物であった。満洲から引揚げてきた妹が世話をする時もあった。

聖母の騎士修道院はいよいよ仕事が多くなって、いまでは孤児を大勢集めて育てていたし、小神学校もたくさんの生徒を入れていた。田川教頭が私のうちを訪れ、クリスマスに誠^(ママ)を招いて連れていった。田川さんの長男は原子爆弾で亡くなったが、誠^(ママ)と同級生であった。

私はひとり寝てミサの留守をした。このごろは生活のどん底であった。クリスマスと云っても大した御馳走はできなかった。……私は大学でミサを立てたときのヘンリック修士の喜びを思い出した。今の私にいろいろの望みはあるが、たった一つだけ云えといわれたら、ためろうことなく、ミサにあずかりたいと答えるだろう。

あくる朝、誠^(ママ)はたくさんの贈物を抱いて修道院から帰ってきた。包を解いてみたら、ポーランド風の大きなパンであった。カヤノよりも私の方が高い歓びの声をあげて、パンの重さを手に味わった。

貧しい修院の修士たちが施しを受けた粉でつくったパンである。それをさらに私らが受ける。……「乞食の乞食」という名をふと思った。まったく私たちは乞食の乞食であった。この自覚は私の高慢心をひしぐのに最も力があった。

一九四八年

この年のクリスマスに初めて私は歌った。子供たちも歌った。御馳走をわが家でたべて――。

この年のうちに建て直しはずいぶん進んだ。天主堂の公民館^(ママ)ができた。下は舞台付きの構堂、上は司祭室、応接室、図書室、会議室。裏に炊事場がついている。浦上養育院も出来上がり、親なしの赤ちゃん二十人ばかりが修道女の世話をうけていた。青年会、婦人会、マルタ会、聖母の姉妹会、少年団もそれぞれ盛んに働いていた。

私のうちでも生活の構えが整ってきた。

弟が中央アジアのアルマアタから帰ってきて、ここの大学に職を得た。その家をもとの家の東隣に建てた。それは市の庶民住宅で、費用は五年の年賦拂いである。その家に弟は新京引揚げの妻子と共に住みついた。六畳の家には森山のおばあさんが住んでいる。私はその家の西側に如己堂と名づけられた小さな家に移った。だから、如己堂は戦災後三番目の住居である。私の二番目の妹の夫もシベリ

ヤから帰ってきた。東の一段下の屋敷に市の年賦住宅を建てて子供と住んでいる。妻は留守中に死んだ。この子たちも父の帰るまでは聖母の騎士園で世話になっていた。まだ二人女の子が聖マリア園で世話になっている。困りきった時には、こんなにして修道会が手をのばして救って下さるので、私たちは苦しい時をしのぎ抜くことが出来る。……私の一家がこうして生きぬき、盛り返すことのできたのも、カトリック社会が愛の共同体であるおかげであった。

クリスマス前夜の御馳走。――食卓には花ろうそくがとろとろと燃え、肉も魚も野菜も、白い御飯も、ほんとうのお菓子もあった。子供たちは今夜着初めの晴衣の汚れを気にしていた。近所のどの家でも明るい燈が輝き、歌う声が起っていた。それで私たちもたくさん歌った。カヤノは一年生になっていたから、小学校唱歌をうたうかと待っていたら、幼稚園で父兄会に歌ったことのある「ドングリころころ」を歌った。^(ママ)誠は中学一年なので、まだ英語があやふやとみえ「オールドケンタッキーホーム」を、わざとお菓子をほうばって、むにゃむにゃと歌った。私は高等学校の寮歌をうたった。息が切れて一番どまりだった。若いころには二時間も三時間もストームしたものだったが……

十一時半には天主堂から寄せ鐘が鳴った。ガラス戸越しにみると、天主堂の大門のあたりに二十ばかり堤燈がともって、いかにも大祝日らしかった。

今年も私は留守番だった。

……はげしい一年だった。ぶっ通し原稿を書いて過ごした。秋ごろから原稿料が入って来始め、ようやく乞食生活から浮き上がった。こんやの御馳走は自分のかせいだ錢でととのえた。しかしこの一年の間に、体はすっかり衰えた。まるでサトウキビのしぼりかすみたいである。

零時、鐘が高らかに鳴りひびいた。ミサが始まった。歌ミサだ。歌っている。歌っている、ここま^(ママ)で聞こえる。誠も歌っている、カヤノも歌っている、

「……グローリア！……グローリア！……」

一九四九年

私と血のつながる者が三十六人、今年のクリスマスを長崎で祝った。二人のわが子を除いて、あとはみな島根縣の郷里から来たものである。家系の移住ということを考えて、なかなか感ずるところがあった。

義弟の一家六人は下の家で、そうぞうしく祝っていた。妹は一人聖フランシスコ病院に入院しているので、アメリカ風の御馳走を頂いて、病院の中の礼拝堂へお参りしたとのことだった。それで、弟の家の座敷の食卓に卓んだのは私たち三十八人だった。郷里の山で獵れたヤマドリとキジを三羽、丸焼きにして出してあった。それにアメリカの読者から送られたフルーツケーキやチョコレート、キャンデーも盛られて、子供たちは樂園を想わずにはおれないらしかった。

国々の読者から贈られた品物が会津若松の絵ろうそくの火に照らし出されていた。――アルゼンチン、ブラジル、カナダ、ユナイテッドステーツ、ハワイ、オーストラリア……それから日本へ来ている各国⁶人の修道会から……。それぞれお国ぶりのクリスマスカードをそえて――。みんな知らない人なのだけれど、イエズス・キリストにおいて結ばれた兄弟姉妹であった。海を隔てて住んではいても、天主の手のひらにおいて隣人であった。クリスマスカードに書かれたのはそれぞれ異なる国⁷語であったが、意味は同じく、御子の御誕生を祝い、私たち一家の新しい年の幸福を祈るものであった。

……原子野に生きる私たちを天主がかえりみ給うていることは、遠国⁸の人々がこのように私たちに愛の手をのばして下さっている事だけをみても、はっきり知ることができた。

教会はたしかにキリストを頭とする一つの体であった。血が通い、生きて動く、大きな体である。手の指の端の一つの細胞が傷つきいたれば、涙腺の分泌細胞がすぐに応ずるように、一人の信者と一人の信者とは、いつも互いに連絡を保っている。それはクリスマスの贈物のような、目に見える品物をやったり、もらったりすることその事ではなく、それに現わされている愛情の流れ合いを云うのである。

私たち親子みたいな弱い一家が、あの恐ろしい時代を生きぬけて来られたのも、この愛情に助けられたおかげであった。

一九四六年

クリスマスだというのに、私のうちには子供を悦ばせるものは何ひとつ無かった。私は床についたきり、熱が毎日三十八度以上出て、たびたび寒けを催し、ふるえた。荒壁の割れ目から切りこむ北風を防ぐために、重々しく蚊帳をつりさげて、中に寝ていた。

世間にはタケノコ生活とかタマネギ生活とかの言葉がはやってしたが、私たちには剥いで売る物もなかった。

^(ママ) 誠とカヤノは大村の純心修道院から招かれた。この修道会経営の女学校に、この子らの母が勤めていた縁故で、修道女の先生たちがいつまでも母代りに可愛がって下さる。

二人はひどい服を着て出かけた。汽車で二時間の旅である。うっかりすると、汽車に乗ってさまよう孤児仲間とまちがえられるかもしれぬ。^(ママ) 誠のズボンのおしりには、爆発したガスタンクくらいの穴があいていた。

クリスマスは家内そろって水入らずに祝うもの——ときまっている。……なぜそうきまっているのか、ひとり寝床に祈り本を読んでいて、初めて私に判った。私は泣きたかった。——

あくる日の夕方、二人の子供は帰ってきた。上等の服をそれぞれ着こんでいた。どちらも寸法が合わずに、大き過ぎた。大穴のあいた古服は、これもおみやげの大きな手提袋にに入れてあった。

あとで修道女が来てのしらせ——^(ママ) 誠とカヤノは始めから元気がなかったそうである。御馳走の席へ坐らされて、次々においしい物を出された時、ベそをかいだそうである。しくしくすすり上げながら、フルーツケーキも平げ、アップルパイも片付け、手の甲で涙をおしぬぐってはコロッケにかぶりつき、何をきかれてもむつつりしたままサラダの皿をあけ、余興に歌いなさいとすすめられると、口いっぱいキャンデーをほうばり、ぼろりと白い涙をこぼしたという……。

修院長さんが新しい服を作ってくれと云って、裁縫の先生の修道女にそう云いつけたが、寸法をとられると、二人の子供はうちへ帰ると云い出して、どんなになだめても聞かない、とうとう泣き出した。そこで修院長さんも弱って、考えこんだ。そして好い思付きに行き当った。学校の秋の展覧会に並べた服をそのまま与えればいい！……

そこで^(ママ) 誠とカヤノは美しい飾りは付いているが、寸法の合わぬ服を着こんで帰ってきた次第であった。

修道女は心づかいがこまやかだから、うちでまた御馳走をたべるようにと、手提袋にはどっさり詰めこんであった。——うちでは二人の子供は大いにはしゃいで、御馳走に手を出すのをうっかり忘れ

ている時間もあった。

年末

一九四九年十二月二十六日の新聞に、衆議院本会議という小さな記事が出ていた。それは「二十四日の衆院本会議は午後七時二十八分開会、公共企業体労働関係法案……云々、鍛冶考査委員長から永井博士表彰にかんする委員会の審議経過を報告、同八時散会」というのであった。国会はそれで納めとなった。

三十日、しぐれていた。自動車の音がしたと思ったら、市の助役さん、市会議長さん、市会事務局長さんの三人が、首をすくめてテラスへ入って来た。そして私を名誉市民に推す旨を墨と筆で書いた紙を一枚手渡した。先日の市会で名誉市民條例がきまり、第一号に私が推されたとのことであった。私は受取る前に

「私は何かするのでしょうか？——」

とたずねた。

「何もしなくて好かですよ」

と議長さんが答えた。

市長さんも来るはずだったが、仕事にあぶれた自由労働者の集団が、今朝とつぜん越年資金をよこせ、と市庁にどなりこみ、いま市長さんをおかん詰めにして、がんがんやっているとのこと。

それで助役さんたちも大急ぎで引返していった。名誉市民とはどんなものかと、條例を読んでみると、いろいろ決めてあったが、そのうちで、私がありがたく思ったことは、病気になれば市の病院などで施療して下さるし、死ねば葬式も出してもらえる。墓の穴も下さるという所であった。これで私も安心である。このような有難い取あつかいを受けた者はこれまでもあった。それは身寄りのない行倒れである。裸で生まれた人間が、死ぬるときにまた裸にまで帰って行倒れるのは貴い。たしかに名誉市民としてあつかわれる値打ちがある。少しでも悪賢い人であったら、決して行倒れにはならないから——。

私は果して行倒れになるまで、浮世の欲のあかを落し切るのでしょうか？……

三十一日 朝の祈り

「私の生き長らえて今日に至れるは、げに主の賜物なれば……」

心にしみて有難く思った。

いのちとは、たとえばクモの糸のようなものであろうか？——切れるときには風らしい風はなくとも切れる。しかしあの重いクモの体をつり下げていても切れない。

新しいクモの糸に日が当たると、真珠の光をあらわす。天井のすみに古びては、すすにまみれて、むさくるしい。

私のいのちは、すすだらけになって残っているのではあるまいか？——

晝、すすはきだと云って誠が天井のあたりを草ぼうき^(ママ)ではらった。

私も一生の終わりに、こんなにして拂ひのけられるであろうか？

夜、十一時半——

天主堂の寄せ鐘がなった。これは今年はじめてのことだった。十二時——つまり零時から「聖年」の祈りが始まるのである。一九五〇年は教皇により聖年と定められた。聖年は痛悔と償いの年である。二十世紀前半の最後の年である。二十世紀前半は人類が最も大きな戦争を二つも行った時期であった。しかも狭い土地での戦さではなくて、地球全体を被う闘いであった。

全人類は戦さの気違いじみたあらしの中にまきこまれ、互いに憎み合い、互いに殺し合い、しかもそれを罪と思わず、正義と思って過ごしてきた。戦争の恐ろしさは、肉体が傷けられ殺されるのもさることながら、人を傷け殺すことが正しいと理屈つける点にある。相手が自分を殺そうとするのは正しくないが、自分が相手を殺そうとするのだけは正しいという理屈を、いかにももっともらしくひねくり出して、とうとうこんなひどい世界をつくり出したのである。

最後に原子爆弾！——人類が減るか、栄えるか？……私たちは分れ路に立ったまま、二十世紀前半の最後の年を迎えようとしている。この最後の年一九五〇年に、過去半世紀をふりかえり、人類の犯した罪を反省し、痛悔し、そしてその償いを果たし、再び大戦争を起さぬ決心を固めてから一九五一年に入りたい。

痛悔と償い——それはカルワリオに十字架をかついで登るイエズス・キリストを想いみることによって、もっとも深く悟ることができる。……浦上の信者は聖年の第一秒を「十字架の道行の祈」をもって始めるのである。

天主堂の中には十字架の道行の絵が十四枚かかっている。

第一留——イエズス死刑の宣告を受け給う

第二留——イエズス十字架を担い給う

第三留——イエズス始めて倒れ給う

第四留——イエズス聖母に会い給う

第五留——イエズス、シレネのシモンの助力を受け給う

第六留——イエズス御顔を布に写させ給う

第七留——イエズスふたたび倒れ給う

第八留——イエズス、エルザレムの婦人を慰め給う

第九留——イエズス三度倒れ給う

第十留——イエズス衣をはがれ給う

第十一留——イエズス十字架にくぎ付けにせられ給う

第十二留——イエズス十字架の上に死し給う

第十三留——イエズス十字架よりおろされ給う

第十四留——イエズス墓に葬られ給う

……この十四場面の前に順々に立止まって祈るのである。

「ああキリストよ、主は尊き十字架をもって世をあがない給いしにより、われら主を礼拝し、主を賛美し奉る。……」

初めに

原子爆弾の眞下になって亡びた町は、それからどんな風に立ち直ったか？——

そこに住みついた人々はどんな風に生きてきたか？——

どんな風にその考え方を変えてきたか？——

家庭はどんな風に新しい形を整えたか？——

この町の姿は世界中の人々は何を訴えたか？——

原子爆弾を思い切って使った目的は果して遂げられたか？——

原子爆弾はどんな新しい事を人々に示したか？——

——そんな問いがいろいろ今も出ています。これから後の世にも続けて出されるでしょう。その参考の一つにでもなれば、と思って私は次々と「長崎原子爆弾もの」を書いてきました。この本には原子野となってから五年目——一九四九年の出来事をおもに載せてあります。

この本を読んで、五年かかって、やっとこれだけの事か、と感じますか、——それともよくここまで来たと思われませんか、……それはいずれと致しましても、ただ一瞬間の出来事の後始末であることを改めて思ってください。

世界大戦争の勢のおもむくところ、とどのつまりは、文明を誇る現代人の感情と意志と智恵を一点に集めて、原子爆弾となったのでありました。——あの一瞬、……あの一瞬さえなかったら……その叫びは五年目のいまなお原子野の至るところで聞こえます。けれどもそれは云うてはならぬ繰り言です。むしろ浦上がきれいさっぱり吹き拂われたのは、全く新しい文化都市を建てるのに都合がよい、と思って、建設に励まねばなりませんまい。

ともあれ、長崎のために、かげになりひなたに愛の手をさしのべて下さった方々に感謝を致し、さらに私が第八冊目のこの本を出すまで励まし慰めて下さった方々に厚く御礼を申し上げます。

この本を世に出すに当り、途方もない出版困難な時節に、いろいろ御心盡しをして頂いた式場隆三郎博士および日比谷出版社の方々に感謝を致します。

一九五〇年春

長崎如己堂で
著者

あとがき

いよいよ原稿の整理も終った今日——一九五〇年三月十九日、新聞にカリフォルニア大学では九十八番の新元素を作り出したと書いていました。その名をカリフォルニウムに決めたい、と発見者は云っているそうです。これは科学の大きな進歩です。私は心からよろこびたい。

けれども、何もかも忘れて、百パーセントの大悦びをする気に今はなれないのが悲しい。この悲しさは、この間、水素爆弾製造競争のしらせがあった矢先だからです。純粹の科学者たちはまさか戦争に使う目的で、この不安定な新元素を作ったのではありますまいが、出て来た新元素を兵器に用いないという保証を欲しがる世界の有様が悲しいのです。——科学の方で何か発明や発見があると、すぐにそれを兵器と結びつけて考えるのが、世界の人々の常識となっている事が悲しいのです。

第二次世界大戦争の終るとき、南からは米国⁹軍、北からはソ連軍をそれぞれ主力とする連合国¹⁰軍が私たち日本を挟み討ちにしました。その最後の止めを刺したのが原子爆弾でありました。連合国¹¹側からすぐに声明が出されました。それは、原子爆弾は戦争に終りの点を打つために用いたのだ、と云うことでした。こんなひどい兵器を作ったのは、もう二度と人類に戦争を企てさせないためだ、と云われました。これは永久平和を産むための最後の手段であった、と云われました。

それを承って私たちは、このおびたしい市民の犠牲は、より大きな惨害を食い止めるために必要であったのだ、と思い、平和のためなら犠牲を忍ばねばならぬ、と小さい子にまで云って聞かせ、納得させたものでした。

それから五年しかたっていません。まだ講和問題さえ手がつかぬのに、すでに、かつての連合国の間に原子爆弾製造競争が始まっているとのうわさを聞きます。……何という悲しいことでしょう！

戦争を終らすための原子爆弾であったはず、それが今では戦争を起すもとになりそうだと云われています。

——ぼくたちはだまされたのではないか？……と大きな男の子は云います。

——お母さんは平和のために死んだのだと云ったが、うそじゃないの？……と小さな女の子が云います。

この子供らが裏切られて果して好いものでしょうか？

あのとき世界の主立った指導者たちが云った声明は、その場かぎりのごまかしに終るでしょうか？

もしそうになったら、原子野に埋まる幾万の骨は起ってありましょう！

私はすでに疲れました。腕の力が弱って、字を書くことが大変な労働に思われます。それよりも困ることは、脳細胞も衰えたとみえ、考えをまとめるのに長い時間が要るようになりました。近く世に出すはずの二冊の本の原稿も出来上がっていますので、もうこれで鉛筆を箱に納め、あとはひたすら祈りの生活に入ろうかと考えておりました。

ところが今年になると、原子爆弾問題が極めてさし迫った形で人類の前に立ちふさがりました。多くの人々が原子戦争を防ぐために盛んに働いています。

長崎の^(ママ)プラトニウム爆弾は今日ではもう時代遅れの小さな物となってしまいました。今日設計され作られているものは、それとは比べ物にならぬ恐ろしい力を出すのだそうです。それゆえ今さら長崎の体験を事新らしげに述べて、原子爆弾の真相は、こんなものだ、と云うのは人を誤るもことになるでしょう。私は原子爆弾の被害について語る資格を、その意味においては失っていると認められるかもしれません。そろそろ口をつむり、手を掛布団の下に隠した方がよさそうにも思われます。

けれども、それは出来ません。平和を保つために、戦争を永久に起さぬために、叫び、かつ書くことが、いよいよ必要な時勢となっています。私は筆を納める決心をひるがえします。そして今年もまた書き続けようと考え直しました。

いつまで続くかわかりませんが、生ける限りは書き続けます。

平和を！平和を！平和を！……と。

長崎市上野町三七三

永井隆

(『輝やく港』以上)

『輝やく港』 解題

永井隆がこの未発表作を脱稿したのは1950年3月19日、これは朝鮮戦争が勃発する三ヶ月前のことであった。広島・長崎に続く核兵器の使用が懸念された当時の状況が「あとがき」からも読者に伝わってくる。永井自身はこの前年(1949年)9月、白血病のため長崎医科大学の教授職を辞しており、この作品は自宅(如己堂)にて執筆と療養と祈りに専念していた時に書かれた。この頃著者の体力が著しく衰えつつあったことは作品からも看取される。この作品原稿の前半部が紛失したらしいことはすでに指摘したので、ここでは現存する後半部についての解題を試みる。

第二次大戦の敗戦後、1946年から昭和天皇は全国を巡行したが、「余香」は天皇が長崎を来訪した際、長大医学部附属病院にて永井を見舞った時(1949年5月27日)の感激をつづったものである。この題材は、永井著の『いとし子よ』(1949年10月30日に講談社から刊行)の中の「いい笑顔」¹³と共通である。またここに含まれる「天皇さまをお迎えして」と題する短歌集(12首)のうち6首は、永井の短歌集『新しき朝』の「白薔薇」¹⁴中の句に明らかな類似が認められる。以下にそれを比較してみよう(順序は「白薔薇」の記載順)。

白薔薇「天皇は科学者にましませば／大学の構内に落ちついたもう」

余 香「天皇は科学者にませば大学の／構内にありて落着き給う」

白薔薇「天皇は神にまさねば私の本を／読みしとじかに申し給う」

余 香「天皇はわたくしの本を読みましたと／ふとのたまいぬ涼しき御まなこ」

白薔薇「原子雲の下に生きのびし／親子三人天皇に笑顔見せまいらすも」

余 香「原子雲の下に生きたる親と子と／天皇に笑顔を見せまいらせぬ」

白薔薇「放射能地帯にいのちいとなめる／微生物も天皇の意識にのぼらむ」

余 香「放射能地帯にありし微生物の／運命も御意識にのぼりたらんか」

白薔薇「天皇もほほえみたまうしばらくは／みんなほほえみいたりけるかも」

余 香「天皇もほほえみ給いしばらくは／みんなほほえみいたりけるかも」

白薔薇「御愛用のルーペチョッキのポケットの／どこにあるらんと親しみ見上ぐ」

余 香「御愛用の拡大鏡はどのポケットに／おさめますやと親しみ見上ぐ」

「右腕」は二部に分かれる。前半は「聖フランシスコ・ザビエル渡来四百年祭」が浦上カトリック教会で1949年5月29日に催された折り、ザビエルの右腕と対面した時(翌30日)の話である。前述の『いとし子よ』の中の「腐らぬ右腕」¹⁵にもこのこと並行する記述がある。

後半の「二」にはその後、教皇特使ノーマン・ギルロイ¹⁶枢機卿と公民館で謁見したときの様子が述べられている。『いとし子よ』の中の「隣人愛」¹⁷も同じ場面を扱っているが、この『輝やく港』

中の描写の方がより臨場感溢れるものとなっている。

「クリスマス」は1944年から1949年までの、それぞれのクリスマスの季節の思い出を中心に書かれたものである。

「一九四四年」はまだ戦争中、特高警察や憲兵に監視される中で、著者の職場である長崎医大のレントゲン透視室で秘密のミサを行った思い出が述べられている。

「一九四五年」は大きく三つの話からなっている。一つ目は同年のおそらく12月、当時永井の住んでいたトタン板の仮小屋に、聖母の騎士修道院のロマン修道士が差し入れをした話。二つ目は同年7・8月（つまり敗戦前後）の同修道院の様子、三つ目は同年のクリスマスイブの夜、聖フランシスコ病院地下の物干場で献げられたミサの話である。なお被爆直後の聖母の騎士修道院の活動の様子は永井の作品『この子を残して』の中の「微笑」にも触れられている。

順序が前後して書かれている「一九四六年」は、永井の二人の子（誠一と茅乃）が大村の純心修道院でのクリスマス会に招かれた時の思い出（伝聞）を中心に、貧しい寝たきりの自身の生活を回顧している。

「一九四七年」には原爆によって瓦礫と化した浦上天主堂に仮聖堂が建立され、信者たちの自宅も再建されつつあった状況が記されている。崩れた天主堂のレンガは大方片付けられたが、当時その一部を原爆の遺構として保存しようという意見があったことが述べられている。この意見は当時市議会でも議論されたが、最終的に保存という決定はされなかった。同教会の信者である永井がここでははっきりと瓦礫撤去（すなわち原爆遺構として保存せず）の立場であったことは注目に値する。

「一九四八年」は大きく二つの話からなっている。一つは浦上教会の復興の様子と、永井の親族の動向。もう一つはこの年のクリスマスの出来事で、永井自身初めて歌を歌ったことなど、身の回りに明るさが戻りつつある様子が描かれている。

「一九四九年」は、この年のクリスマスに永井の故郷島根県から親族34人が長崎に来て、永井の弟の家でクリスマスを祝った様子が記されている。永井の著書の海外の読者から送られた品々やクリスマスカードを前に、主にある兄弟姉妹の愛の交わりに思いを馳せている。

「年末」は1949年の年末（12月30日）、永井を長崎市の名誉市民に推す旨の通知を市議会議長等が永井の自宅（如己堂）に持参してきたことが述べられている。永井は、1949年12月に長崎市議会より「名誉市民」（第一号）の称号を授与され、また国会の表彰勧告に基づいて翌1950年6月に天皇からの金杯ならびに内閣総理大臣からの表彰状を授与されている。

「三十一日 朝の祈り」は、大晦日の晩から1950年の年始を迎えるにあたっての黙想である。

以上、この「輝やく港」は、原稿の後半部分のみという不完全な保存状況ながら、当時の世相、また爆心地・浦上のカトリック教会を中心とした状況の詳細を知る上で独自の資料価値を有するものと思われる。またこの作品と永井の他作品との間に類似・並行する部分が存在することも明らかになった。この作品の失われた前半部分が発見されることを期待したい。

-
- 1 小西哲郎「永井隆『輝やく港』(未発表作)——作品と原稿——(1)」2006年11月『長崎外大論叢』第10号、151～163頁。
 - 2 この文字は、原稿ではひらがなの「ふ」のような崩し書きで書かれている。本稿では、この「ふ」型の「国」の個所を注で明示しておく(前号「注2」参照)。
 - 3 注2参照。
 - 4 注2参照。
 - 5 永井隆の長男・永井誠^{まこと}一(1935－2001)を指す。この名は、本稿では一貫して「誠」と表記されている。
 - 6 注2参照。
 - 7 注2参照。
 - 8 注2参照。
 - 9 注2参照。
 - 10 注2参照。
 - 11 注2参照。
 - 12 小西哲郎、前掲論文、152頁。
 - 13 『永井隆全集Ⅲ』151-153ページ。
 - 14 『永井隆全集Ⅲ』530-534ページ。
 - 15 『永井隆全集Ⅲ』146-150ページ。
 - 16 Sir Norman Thomas Cardinal Gilroy KBE (1896-1977) シドニーに生まれる。1923年司祭。1935年司教。1937年大司教。1946～1971年枢機卿。(オーストラリア・カトリック教会ホームページ [<http://www.sydney.catholic.org.au/Archdiocese/History/Gilroy.shtml>] より。2007年9月25日)
 - 17 『永井隆全集Ⅲ』140-146ページ。
 - 18 『永井隆全集Ⅰ』35-37ページ。

konishi@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp